

2019年1～2月掲載分

習志野 大慈弥 爽子  
街中の光が星となる聖夜  
著ぶくれて怠け心を太らせる  
期待などなけれどバレンタインデー  
月蝕の残る光を凍らせる  
湯気立に喉の機嫌を問ふ夜更

藤沢 藤田 富子  
あるじ無き庭にひときは薫紅葉  
俳聖の行脚を偲ぶ冬日和  
焼薯の売り声ひびく夜のしじま  
朽ち果てし古寺深閑と冬に入る  
冬日和仏のお顔慈悲に満つ

八王子 石井 蓉子  
湯舟にも届く焼薯売の声  
ボーナスやもったいなくて仕舞ひ込む  
山茶花の花びらハートの形して  
一仕事終へれば冬日はや落ちて  
ゆっくりと身体沈めている柚湯

町田 小森 まさひこ  
元朝やまた一年が始まりし  
百枚の札を並べて冬座敷  
頬刺して身を切りしごと風冴ゆる  
凍月のまん丸にして中天に

松尾芭蕉  
元旦や思えばさびし秋の暮  
似合しや新年古き米五升  
天秤や京江戸かけて千代の春  
元旦は田毎の日こそ恋しけれ  
門松やおもへば一夜三十年

2019年3～4月掲載分

習志野 大慈弥 爽子  
目も指もやはらかにして雛飾る  
駅前に会ふぴかぴかの初桜  
夜更しが好きで朝寝が大好きで  
赴任地へ踏み出す一歩初桜  
無防備に残れる緻密なる古巢

藤沢 藤田 富子  
つくばひの水溜れてゐる寒の朝  
余生にも旬のときあり春の旅  
老境のぼけ防止とて春の旅  
春浅し闇に音する獅子おどし  
我が影のややほそりゆき月冴ゆる

八王子 石井 蓉子  
一年の運をまかせて初みくじ  
初風呂や一人居という贅として  
梅咲くや生きるの大好き一人でも  
春近し道行き交う人の笑顔にも  
なんとなく日脚の伸びていることに

町田 小森 まさひこ  
盆梅の家の移ろひ知って咲く  
芝青む両翼狭き野球場  
入社へと続くスーツで卒業す  
源氏山に桜咲かせる忌日かな  
沈丁の香の流れざるひと日

2019年5～6月掲載分

習志野 大慈弥 爽子  
澆刺と透ける二の腕夏に入る  
唇をくすぐり草笛の鳴らず  
万緑へ万緑へ一筋の道  
晴れきらぬ空に薄暑のつのもり来る  
差し潮を堰くも佃の祭前

2019年7～8月掲載分

習志野 大慈弥 爽子  
ゴージャスに切るマンゴーの種が邪魔  
日盛の街が歪んでをりにけり  
静かさといふ激しさに日の盛  
初秋の星影ゆっくりと動く  
白玉や旧知のやうな初対面

八王子 石井 蓉子  
新しき部屋得しところ柿の花  
紫陽花の蕾大きくなりしかな  
片思いせし時をふと矢車草  
一人居に空は大きく桜桃忌  
夏至の夜の夜更かし吾城ワンルーム

町田 小森 まさひこ  
開発の波に抗せぬ噴井かな  
校門の脇の噴井の説明書  
泥鰯鍋焼けたる舌に葱をあて  
若人の主役となりし盛夏かな  
菜園の隅に独活あり花咲かせ

2019年9～10月掲載分

習志野 大慈弥 爽子

音を消し月の光をたたむ波  
野分去り空透明になりゆけり  
しがらみをつるりと捨てる衣被  
読み返す旅の便りや十三夜  
病む夫の身のまはりより冬仕度

八王子 石井 蓉子

夕暮れや神社の風の涼しくて  
人気なき神社の朝の蝉時雨  
洗濯物仕舞へば入道雲笑う  
おはようといつもの笑顔秋立ちぬ  
一人居に祭余韻のさめやらず

町田 小森 まさひこ

光湖はるかに置きて草の花  
ベッドライト丸く映して夜の霧  
秋の田の日毎黄金となりゆける  
秋刀魚骨一直線にして終はる  
豊穰の大地とんぼの群れてをり

小林一茶

秋風やあれも昔の美少年  
夕日影町一ぱいのとんぼかな  
名月をとつてくれろと泣子かな  
名月や膳に這よる子があらば  
山は虹いまだに湖水は野分かな

2019年11～12月掲載分

習志野 大慈弥 爽子

かいつぶり一羽を追ひかけるレンズ  
空はばらせ隼の急降下  
鴉来て雀が逃げてゆく枯木  
水鳥の影を光となす流れ  
白鳥の頸が怒ってをりにけり

八王子 石井 蓉子

台風の過ぎて見上げる空の青  
朝散歩深みし秋を惜しみつつ  
秋深しコートの際を立ててをり  
暮の秋の一人静かな日曜日  
夕照に色増していく金木犀

町田 小森 まさひこ

朝はあさの夕にはゆふの枯尾花  
冬雲の下に日差しの残りけり  
東京駅の真正面の黄葉道  
また一つ僧都音して庭の黙  
年玉の用意済ませて待つ時間

正岡子規

柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺  
行く秋や一千年の仏だち  
松山や秋より高き天主閣  
長き夜や千年の後を考へる  
灯ともして秋の夕を淋しがる